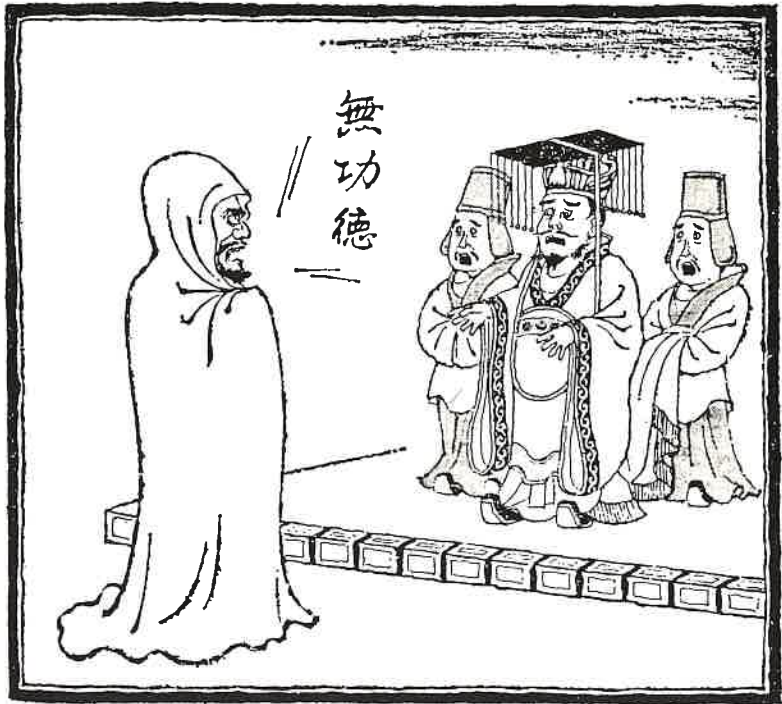
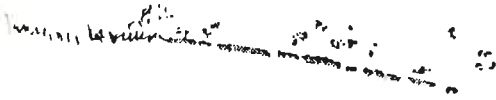
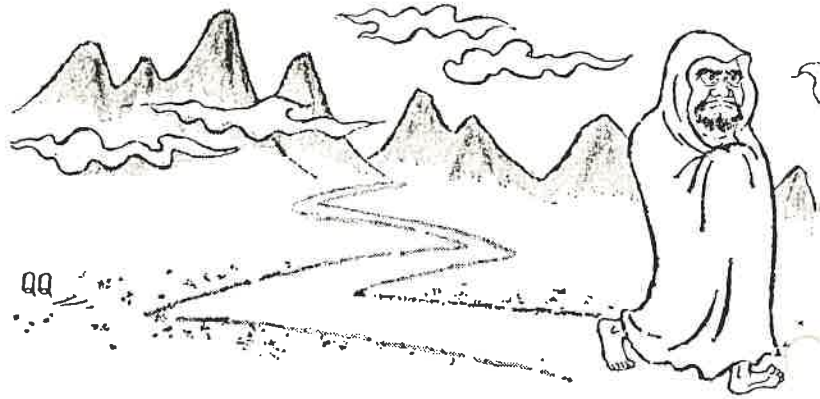


雪の晨に臂を断ち





ダルマさんでお馴染の菩提達磨大師は、三年の歳月を費してインドから中国（当時は震旦こんたんと呼んだ）に来した。

お釈迦さまの教えは、迦葉尊者、阿難尊者、商那和修尊者というように、あたかも一つの器の水を他の一つの器に残さず漏らさず移すように、師匠から弟子、師匠から弟子へと法灯が伝わったのだが、ダルマ大師は第二十八代目の人である。

交通未開のころ、しかも老齢の身をもって未知の国に向かうその勇猛心は、身命を惜しむ凡人には思いも及ばないところで、これは、ただひたすらに真理を伝え、迷える衆生を救おうという大慈悲から生れた尊いぶつぎょう仏行である。

普通元年（五二〇年）九月二十一日、ダルマ大師が広州府に着いたことを知った梁の武帝は、人を派し、大師を金陵（いまの南京）に迎え、

「自分はこれまで寺を建て、経を写し、僧尼を供養してきたが、どんな功德があるか」

と、たずねた。

ダルマは、味もつけなく

「無功德」

と、答え、色よい返事を期待していた武帝を失望さ

せた。

武帝の機嫌をとればよいのに、とは凡俗の浅慮で、

迷える衆生を救おうという誓願一筋に生きるダルマ大

師には、妥協や迎合はミジンもなかった。

「仏心天子」といわれる梁の武帝も、会ってみれば、

現世利益を求めるだけの仏教の狂信者に過ぎないこと

を知ったダルマは、揚子江を渡って魏の国におもむき

崇山すうざんの少林寺にとどまり、壁に向かって九年間坐禅し

た。それで人々は彼のことを「壁観へきくわんバラモン」と呼ん

だ。

このダルマ大師のところに、神光しんこうという名の修行僧

がおとずれた。時は十二月九日で、大雪が山を埋め、

峰を没していた。神光は、雪をふみわけ道を求め、つ

いにダルマ大師のところにたどり着いた。深山高峰の



冬の夜は、屋外に立っていることはできそうもなく、竹の節さえ割れる寒さだった。が、ダルマ大師はふり向きもしない。神光は、眠らず、坐らず、休まず、雪中に直立不動のまま立ちつくした。降りつもる雪は、神光の腰をうずめ、落ちる涙は凍って玉をなし、衣服は凍りついて、さわると一様に氷柱が立っている。全



身は冷え切っているが、求道の心の火は赤々ともえていた。

夜が白々と明けかけたころ、ダルマ大師はようやくふり向いてたずねた。

「お前は長い間、雪の中に立って何を求めようとしているのか」

「お願いです。お慈悲をもって真実の仏法をお示しください！」

涙ながらに懇願する神光の言葉に対するダルマの言葉は氷よりも冷いものだった。

「仏法を求むるはいのちがけである。小徳小智のものが軽々しく慢心をもって真実の仏法を求めようとしても、それは無駄なことだ」

神光は、この言葉をきいて、いよいよ志を固め、ひそかに利刀をとり、みずから左の臂を斬り落してダルマの前に差出した。

ダルマはこの神光こそ法を継ぐに足る人物であることを見てとり、入門を許した。

こうしてダルマ大師は中国禅宗の初祖となり、神光改め慧可えかは二祖となった。

「二つの月」(佐藤俊明著・井上球二絵)より